

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

## Funky Corner

文・撮影●波多利朗 text and photo by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>(E-Mail) [catty@mxp.mesh.ne.jp](mailto:catty@mxp.mesh.ne.jp)

## 初期のサブノートパソコン「BICOM SL60」

P/ECE用日本語エディタPEditと、  
Ruputer用日本語エディタRupEditのこと

本誌前号にてご紹介したP/ECE用日本語エディタ「PEdit」は、おかげさまで思いの他反響が大きかったようだ。先日、筆者の友人でプロの整備士であり携帯端末マニアでなおかつ70年代の歌謡曲に異様に詳しく、また「あずまんが大王」の熱狂的なファンでもあり、隠れアニメオタクであるところのRandy氏が、本誌前号を見て、遅ればせながらP/ECEを購入したいと言ってきた。

なんでも氏はインターネット上のショップを片っ端からチェックし、東京近郊のパソコンショップを軒並み当たったものの、P/ECEの在庫はどこにも無く、入手できなかったそうなのだ。実際、某店では店員さんから「P/ECEですか? いやあ、20台くらい入荷したんだけど、AQUAPLUSの公式ガイドとモバイルプレスが出た後で、在庫一掃しちゃいましたよ」という有難いお返事までいただいたそうである。まあ、真偽のほどは置いてくとして、さっそく氏と秋葉原のショップを探索してみることにした。

というのも、氏は秋葉原ではとうの昔に在庫が尽きてしまい、入手できるわけが無いと思ひ込み、探さなかったそうなのである。しかし灯台下暗しとはこのこと。石丸電気のゲーム1で、新パッケージではあるがまだP/ECEの在庫があり、無事購入することができた。

一方、P/ECEの日本語エディタ、PEditを作成した柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏とはいえば、反響の良さに悪乗りし、今度はナント! 一世を風靡したプログラマブルウォッチ、「Ruputer」上で動作する日本語エディタ、

「RupEdit」なるものを開発してしまった(写真A)。

何でも、PEditの開発で、十字カーソルとボタンが4個あり、開発環境がオープンとなっているプラットフォームは無いかと探していたら、Ruputerに到達したので、開発したとのことだそうだが、それにしても腕時計に日本語エディタを組み込んでしまうこの人っていったい……  
^\_^;; (写真B、C、D)。

というわけで、今回の前フリでは、このRupEditの画面写真をご紹介しておくことにする。P/ECEと異なり、Ruputerではハードウェアリソースがさらに厳しくなっているので、編集できる文書の最大サイズは2,400バイトまでである等、かなり制約があるものの、腕時計で日本語のメモが取れるのは、痛快を通り越して異常である。氏はそのうち、電子レンジやビデオデッキにも日本語エディタを組み込みかねないアブナイ存在だな……。

基本的な操作方法は、前号でご紹介したPEditとほぼ同じであるので、Ruputerをお持ちの方は、是非使ってみていただきたい。プログラムアーカイヴは、下記のURLに格納しておいたので、そこからダウンロードしてください。

<http://www.funkygoods.com/nazopa/ruputer/>

しかし、Randy氏にしろ柴隠上人 稀瑠冥閻守氏にしろ、最近筆者の周りにはどうも壊れちゃった人が多くいすぎるような感じがする。友達は選ばなくてはならないと思う、今日この頃なのであった……合掌!

## EDITOR

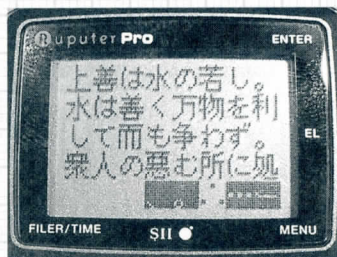
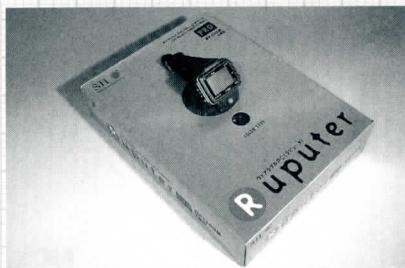
日本語エディタ第2弾!!

## 腕時計上で動作する 痛快日本語エディタ RupEdit

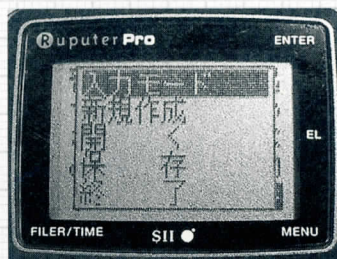
①Ruputer用日本語エディタ「RupEdit」のアイコン



②Ruputer Pro  
のパッケージ



③文書編集画面  
あの小さい液晶画面に、横8文字×4行を表示する。最下行は、かな漢字変換用のシステムライン



④メニュー画面  
メニュー画面は全部で3画面用意されている



⑤バージョン表示画面  
今回撮影したバージョンは、2002年7月20日制作のVer.1.0

## 1993年という年

本題に入ろう。

筆者の押入れは魍魎魍魎が巣食う魔界村状態だということは、本誌でもご紹介した通りなのだが、このほどその奥底より珍しいマシンが「発掘」された。「BICOM」と書かれたその箱には、忘れもしない筆者が最初に香港で購入した超初期型のサブノートパソコンが入っていたのだ。今回は、サブノートパソコン黎明時代の製品であり、今となっては比較的レア度が高いと思われる「BICOM SL60」についてご紹介しよう (001)。

筆者はこのサブノートパソコンを1993年3月に香港で購入している。まず最初に、ドッグイヤーと称されるこの業界において、1993年とはいったいどのような時代であったかをちょっと振り返ってみよう。同じく押入れに突っ込まれていた1993年9月のパソコン雑誌を紐解けば、最速のCPUはIntel 80486DX2-66MHzだったりするし、

Windowsは当然3.1全盛時代、一方DOSも健在で、最新のPC-DOS 6.1出荷! などといった記述も見える。広告欄には今は無き日本DECがブランドもののPC広告をカラーページで掲載していたり、IBMがOS/2の広告を見開



001  
P/ECE本体  
サブノートパソコン黎明期の製品、ABC ComputerのBICOM SL60。当時としては画期的にコンパクトなマシンであった

002a



**IBM製サブノートパソコンの代表傑作、ThinkPad220**

タッチタイプ可能なキーボードと80MBの内蔵HDDを搭載したサブノートパソコンの代表作。CPUはi80386Sx (16MHz) と非力であったものの、乾電池6本でどこでも使用することができ、持ち運べるパソコンとして非常に重宝した!

002b



**HP製サブノートパソコン、OmniBook425**

まるでHP95LXをそのままかくしたようなデザインがユニークな、HP製サブノートパソコン、OmniBook425。最高に使いやすいポップアップマウスと、一生タイピングしていたい超超優れもののキーボードは、永遠に不滅です! その後、OmniBook600Cで、HP製サブノートは頂点に達したと個人的には思っていたりする

きカラーページに出して頑張ったりしている。グラボでは、あのWEITEKのPOWER9000が、「驚異的なパフォーマンスを発揮する究極のグラフィックスボード」ということで絶賛紹介されており、CD-ROMドライブと音源カードが付いたマルチメディアPCに誰もが羨望の眼差しを向けていた。さらに、暗い過去を持つオヤジが一人店を開き、疲れた男たちがどんぶり一杯の温もりを求めて

やってくる、そんな立ち食い蕎麦屋をそこかしこで見ることができた時代でもあった。おっと最後のフレーズは勢いにまかせて書いてしまったものなので、気にしないでいただきたい(今時このギャグのネタがわかる人って、いるのかねえ……?)。

とにかくそんな感じの1993年において、巨大なノートパソコンは高嶺の花ながら各メーカーがこぞって発売していたものの、サブノートパソコンとなると、一般の人にはその存在すらあまり認知されていない状態であった。ちなみに、当時の雑誌の新製品紹介コーナーでは、PCMCIAスロットを4個持つ究極のサブノートパソコンとして、HPの「OmniBook300」が掲載されていたりする。このサブノートのCPUは、AMDの386SXLV/20MHzを使用していた。しかし米国のみの発売であり、日本では入手困難か、入手できたとしても非常に高価な商品であった(米国での発売価格は2,375ドルと記載されている)。一方、日本IBMもThinkPad220の発売を開始していたが、こちらもまだ非常に価格が高く、一般貧民はたやすく購入できなかった(002a、002b)。

余談だが、ThinkPad220は、その後秋葉原T・Zoneにて在庫処分の際に激安にて購入し、けっこうガシガシと使い込んだ。あれは確か1995年頃のことだったように記憶している。スイッチ1つで白黒反転する液晶、ユニークなトラックボール、タッチタイプ可能なキーボード等々、筆者的にはとても気に入っていたサブノートパソコンで

あった。

さて、もともと小さいものには目が無かった筆者は、このサブノートという製品に非常に興味を持つ。しかし、日本ではなかなか現物を拝むことができない。というわけで、1993年3月、香港を訪れた際に購入すべく探し回ったというワケである。

シャムスイポ  
深水埗で購入した  
**BICCOM SL60**

1993年当時、香港には七大電腦商場とよばれる電腦中心(コンピュータショップ)が存在した。その七つとは、下記の通りである。

- \*高登電腦廣場
- \*黄金電腦廣場
- \*旺角電腦中心
- \*星光電腦中心
- \*新高登電腦廣場
- \*皇室堡電腦廊
- \*銅鑼灣電腦中心

これら7つの電腦中心が今も全て残っているかどうかは判らない。最近では香港にもパタリ行かなくなりましたが、BICCOM購入の数年後に香港を再訪した際、すでにいくつかの電腦中心が無くなってしまったこともあり、現在ではかなり様変わりしてしまったものと思われる。

BICCOMを購入した場所は、深水埗(シャムスイポ)にある高登電腦廣場だ。啓徳空港が健在であった頃の深水埗上空は、空港に着陸するジェット機が落ちるんじゃないかと思われるくらいの超低空を飛行しており、さながら押井守監督の「攻殻機動隊」のシーンそのものであった。高登電腦廣場は、細長いビルの中に入っている。内部は秋葉原のガード下のような雰囲気、小さいショップが軒を連ねる。そんなところをブラブラ歩いていると、百嘉電腦公司(PARKER COMPUTER CO.)という

店先にサブノートが展示されているのを発見。これがBICOM SL60だった。

当時、ばかでかいノートパソコンを見慣れていた目に、このBICOMは非常に小さく魅力的に見えた。メーカは聞いたこともないし、ショップのあんちゃんは調子が良いだけでイマイチ信頼できるかどうか不明であったし、第一ちゃんと使いものになるかどうかも判らなかつたのだが可愛さの余り思わず9,270香港ドルでこのマシンを衝動買いしてしまった。当時の換算レートで、日本円にして約14万円程度。若気の至りとはいえ、今思えばずいぶんと思ひ切ったことをしたものだ。因みに、不況の影響をモロに受けて経済的に非常な苦境に立たされている現在の波多利朗は、バルクの音源カードひとつ買うのにも、2週間は悩むようになった。^\_^;;

さて、レア物をゲットできて意気揚揚として帰国したのは良かったのだが、その後秋葉原のパソコンショップ「プロサイド」で、同製品の内蔵HDDを80MBにアップグレードしたBICOM SL80が売られているのを見て、少々がっかりする。まあしかし、価格が18万円程度もしたので、安く入手できただけでも良かったと自分自身を納得させてしまった。

## BICOM SL60 というマシン

それではこのBICOM SL60というマシンについて見てみよう。メーカは香港にあるABCコンピュータという会社。なんか安易な名称であるが、事実だからしょうがない。当時の所在地は下記の通りである。ところで、現在もこの会社って存在するのかなえ？

### ABC Computer

28/F., WYLER CENTER PHASE II, 200 TAILIN PAI ROAD, KWAI CHUNG, HONG KONG.

BICOMの外箱は、小柄マシンらしく取っ手付きのお洒落なものだ。外箱には、英語キーボード仕様であることを示す「U.S.A」のシールと、中国語FEPである「イーテン」がプリインストールされていることを示す「ET」シールが添付されている(003)。

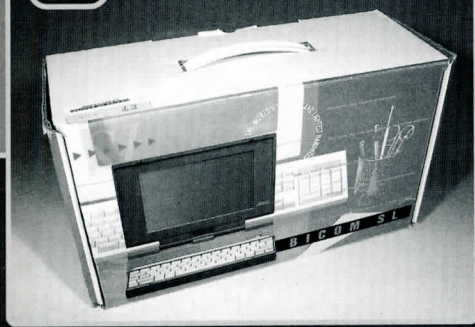
製品構成は下記の通り(004)。

- BICOM SL60本体
- FDDユニット
- ACアダプタ (9.5V 3A仕様)
- DR-DOS Ver 6.0 (マニュアル付きのフルセット版)
- ユーティリティFD1枚  
(BSL UTILITY DISK 26th February, 1993)

ユーティリティFDには、Windows3.1用ディスプレイドライバソフトとフォント類及び中国語FEP「イーテン」関連の常駐ソフトが格納されている。ACアダプタは、これでもかと言うくらいデカイもので、こいつを持ち運びするのは相当覚悟が必要だ。特徴的なのは、FDDドライブユニットである。通常、サブノートのFDDユニットは、接続ケーブルを介して繋げるタイプがほとんどであるが、このBICOM SL60のFDDユニットは、ナント！本体に直接合体させる。当然合体させると横幅が広くなり、置き場所にも苦勞するし、なによりも下手に持ち上げると「バキッ」とか音がして逝ってしまいそうで怖い。今ならば絶対こんな設計はしないであろう。そういう意味では、かなりカルトなマシンではある。また、このFDDユニットは、駆動するために



003



BICOM SL60の外箱

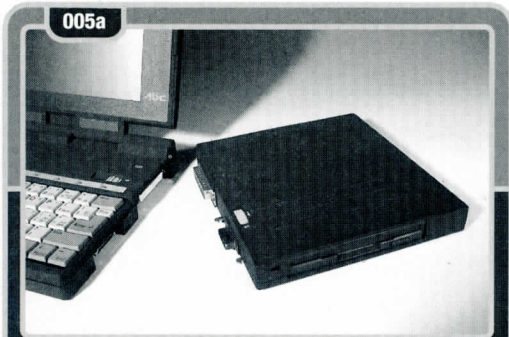
当時としてはかなりオシャレなデザインの外箱であった。外箱には持ち運びしやすいよう、取っ手もついていた

004



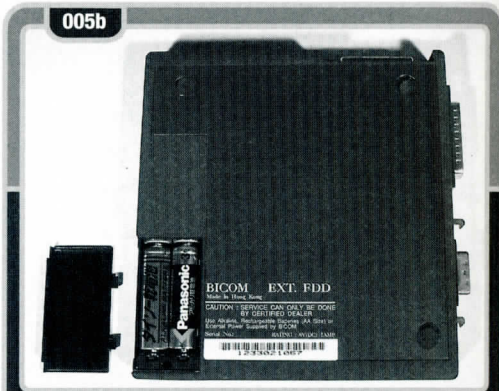
BICOM SL60の製品構成

箱の中には、これだけのものが含まれている。ただし、本体の取り扱い説明書と保証書の類は一切入っていない。取り扱い説明書は、おそらく梱包時に忘れられたものと思われる。痛かった……



### 005a 外付けFDDユニットの外観

駆動するために専用の電池が必要な外付けFDDユニット。ユニークなのは本体との接続方法で、写真のようにBICOM SL60本体右側に搭載されたコネクタに直接合体させて使用する。FDDユニットには、パラレルポートのコネクタも用意されており、本体に合体しても、パラレルポートが使用できるようになっている。これって結構ギミック!



### 005b 外付けFDDユニットの裏面

FDDユニットは、駆動するために単三乾電池4本を必要とする! たかがFDDユニットに単三乾電池4本とは、驚きだ。電池は写真のようにFDDユニット本体裏面に搭載する

単三乾電池4本が必要となる。何分昔の製品ゆえ、本体から電源を供給してもらったのでは、本体バッテリーが持たなかったのだろう (005a, 005b, 006)。

マシン本体の大きさは、ThinkPad220とほとんど同じである。筐体表面はグレーのラバー塗装がされており、手に持った感じはしっくりとしてなかなか良い。マシン外観は良くデザインされており、非常に気に入っているのだが、1点だけ気に食わないところがある。それはLCDパネルを開閉するボタンと、電源スイッチの色だ。カラーでお見せできないのが残念というくらい、それはそれは目も鮮やかな青でぬりたくられている。このおかげで、高級感がかなりスポイルされてしまっている。

キーボードは64キーで、5列配置となっている。ファンクションキーは独立しておらず、数字キーと兼用で使用する。キーピッチは15mm程度確保されており、タッチタイピングも容易である。クリック感はコクコクといった感じで、ストロークもそこそこあり、押し間違ふことは少ない。しかし、やはりHP OmniBook 600Cのキーボードには、とうてい太刀打ちできない。ノートパソコン

に限らず、キーボードはパソコンと人間との接点となるため、筆者はかなりこだわりを持つほうだ。今まで使用してきたキーボードのうち、1つだけ選ぶとすれば、それはもう文句無しにOmniBook 600Cである。このサブノートのキーボードは、キーボードだけ切り出してデスクトップ機に使いたいと思ったほどである (007)。

おっと、また脱線してしまったので、話をBICOMに戻そう。キーボード右上には電源キーとバッテリーの状態を示すインジケータがある。バッテリーインジケータは満充電の時に緑色に発光し、レベルが低くなると赤に変わる。

バッテリーであるが、マシン底面に単三タイプのアルカリ乾電池、ニッカド充電電池もしくはニッケル水素充電電池を5本格納できるようになっている。また、CMOSバックアップ用ボタン電池であるCR2025も、この部分に格納する。充電電池を使用した場合には、ACアダプタを接続すると自動的に充電されるが、アルカリ乾電池を使用する場合にはACアダプタは利用できない仕様となっている (008)。

LCDは少々特殊な仕様となっている。反射型モノクロLCDを搭載しており視認性もままずまざであるが、解像度



### 006 FDDユニットを接続したところ

で、これが本体にFDDユニットを接続したところ。横幅は約40cm近くになり、置く場所に非常に困る。なによりも、不用意に持ち上げると、逝ってしまいそうで怖い



### 007 BICOM SL60のキーボード

ファンクションキーが独立しておらず、キー数も少ないため非常にすっきりとしているキーボード。15mmのキーピッチがあり、ストロークも確保されているため、タッチタイプは容易と言える。もっとも、あまり手がでかい人には不向きかも。キーボード右上に見えるのが、電源スイッチとバッテリーのインジケータ



### 008 BICOM SL60のバッテリー

本体裏面にバッテリー格納エリアがある。バッテリーは、単三型のアルカリ、ニッカドもしくはニッケル水素を使用できる。バックアップ用のボタン電池は、これら単三電池の下側に、格納スペースが設けられている



### 009 BICOM SL60のLCD画面

LCDは640×400のDCGA仕様を搭載。ちょうど謎ば〜機に用いられているCGA液晶の、倍の大きさである。VGAではないため、普通にDOSJ 5.00/V等を入れても日本語は表示できない

が640×400ドットのダブルスキャンCGA (DCGA/2Color) を採用しているのである。この手の解像度を搭載したマシンには、東芝のJ-3100シリーズやOlivettiのマシンなどがあった。要するに、謎ば〜機で良く用いられているCGA画面が、縦方向に倍に拡張されたサイズである。この若干特殊な解像度のため、後述する日本語化が少々ややこしいことになる。って〜か、最初からDCGA仕様であることを知ってたら、おそらくは購入しなかったんじゃないかな? まあ、これが元で、日本語化にあたっては、かなりハードな洗礼を受けることになり、それはそれで結構楽しかったのではあるが…… (009)。

BICOM SL60の特徴のひとつに、HDDを内蔵していることが挙げられる。たかだか60MBしかないものの、DOSベースで使用するには十分すぎる容量であり、意外と重宝するものだ。このHDDであるが、HDDユーティリティソフトメーカーとして、DOS/V初期の頃有名であったMicro HouseのIDE IDENTIFICATION UTILITYを使って調べてみると、AREALというメーカーのMD2060という2.5インチHDDが使用されていることがわかる。このHDDは、BIOSからはパラメータが自動認識されるようになっている。

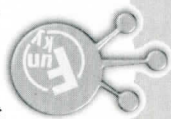
BICOM SL60には、シリアルポート、パラレルポートがそれぞれ1つずつ搭載されている。マシン診断ソフトを使用すると、シリアルポートは2つ内蔵されていることになっているが、インターフェースとして出ているのは1個のみのようだ。本体右端には、D-Sub 25Pin メスのパラレルコネクタと、FDD接続専用コネクタが配置されている。また本体背面には、ACアダプタコネクタとD-Sub 9Pinオスのシリアルコネクタが搭載されている。これらのコネクタは、それぞれカバーで覆われているようになっているが、このカバーの造形が良くできている。不用意に取り外れないように、小さなノッチが付いているのだ。このあたり、なかなか芸が細かい (010)。

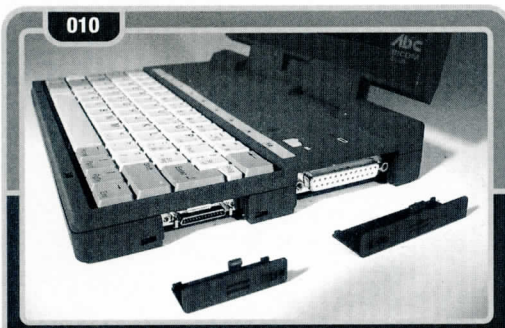
さて、BICOM SL60には、現代のサブノートパソコンには必須の機能であるPCMCIAインターフェースが搭載されていない。これは最初見た時から意外な感じを受けた。この時代の製品であれば、当然PCMCIA規格は存在したはずである。おそらくはスペースの問題から搭載できなかったのであろう。

本体左端には、液晶画面のコントラスト調整ダイヤルと、本体不明の専用コネクタが配置されている。この本体不明のコネクタであるが、さっぱりわからない。取り説を見れば載ってるだろうと思われるかもしれないが、信じられないことに、このマシンには取り説が付いてこなかったのだ。あるいは百嘉電脳公司のいいかげんなあんちゃんが入れ忘れたのかもしれないが、気が付いたのは帰国した後だっただけに、どうしようもない。ひょっとしたら、この専用コネクタに接続する、外付けのPCMCIA ドライブユニットといったものが存在していたのかもしれない (011)。

以下にBICOM SL60の仕様を掲載しておく。

メーカー/モデル名称	ABC Computer Co., / BICOM SL60
CPU	80386SL (25MHz)
搭載メモリ容量	2MB
ディスプレイ	640×400dotモノクロLCD ダブルスキャンCGA (DCGA) 仕様
キーボード	QWERTY 64Key
I/Oポート	シリアルポート×1、パラレルポート×1、外付けFDD接続用コネクタ、謎のI/Oコネクタ (詳細仕様不明)
HDD	2.5インチ60MB HDDを内蔵 (AREAL MD2060)
本体重量	約1kg (バッテリーを含む)
メインバッテリー	ニッケル水素蓄電池×5本 (ニッカド電池もしくはアルカリ電池も使用可能)
サブバッテリー	CR2025
カードI/F	なし
本体外形寸法	223 (W) × 162 (D) × 31 (H) mm
BIOS	AMI BIOS (386SLパワーマネジメント機能付き)
FDD	外付け3.5インチFDDユニット
FDDユニット寸法	150 (W) × 162 (D) × 31 (H) mm
付属ソフト	DR-DOS Ver 6.0、専用ユーティリティFD

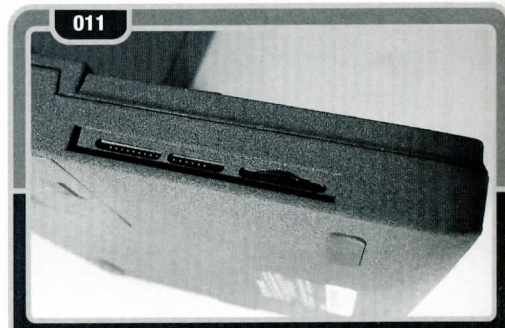




010

### BICOM SL60のI/Oコネクタ

本体右側に配置されているI/O関連のコネクタ。写真左から専用FDDコネクタ、25Pinパラレルコネクタが並ぶ。これらのコネクタは、非常に良くできたカバーで覆われている



011

### 本体左側にある液晶濃度調整ツミと謎のコネクタ

本体左側には、ダイヤル式の液晶濃度調整ツミと、全く持って謎極まる専用のコネクタが配置されている。特にこの謎の専用コネクタについては、取り説が無いので何に利用できたのかさっぱりわからない。どなたかご存知の方がおられたら、教えていただきたい

## 🔌 BICOM SL60の日本語化

さて、今回発掘されたBICOM SL60の日本語化の方法について、HDDの中を調べていたら、なにやらワヤクチャな状態となっており、最初はどうしてこのようなコンフィギュレーションになっているのかが理解できなかった。情けないことに、自分で設定しておきながら、すっかり忘れてしまっていたのである。そこで記憶の糸をたどりつつ、本マシンの日本語化の方法について述べてみよう。

BICOM SL60の日本語化で注意しなければならないことは、このマシンが上述したようにDCGA仕様のLCDを搭載していることだ。よって、通常のDOS/Vをインストールしようとしても、日本語が表示できない。そのため、他のデスクトップマシンを利用して、DCGA対応の起動ディスクを作成し、それを用いてBICOMにDOSをインストールする方法を採る。

まず、通常のDOS/Vマシンを使用して、日本語環境が整った起動用システムFDを作成し、基本的なDOSコマンドをコピーしておく。次に、ディスプレイドライバを変更する。VGAを前提としているDOS/V用の\$DISP.SYSは、BICOMでは使用できないためだ。そこで、@niftyの「FPCUPRO」フォーラムの「DOS/V専用(2)V-Text&FONT」ライブラリに登録されている「DISPT015.LZH DCGA用DOS/Vドライバ」を使用する。なお、このドライバは現在でも律儀にアップされており、いつでも使うことが可能だ。

このソフトは、ダブルスキャンCGAを搭載したXT/AT互換機でDOS/Vを動作させるための、ディスプレイドライバ作成用差分ファイルとなっている。差分ファイルなので、本ソフトウェア単体では動作しない。IBM DOSJ 5.02/Vに含まれている\$DISP.SYSが必要となる。この\$DISP.SYSにLDIFFを利用したバイナリ差分を実行させ

ることにより、DCGA対応ドライバであるDISPDC.SYSというディスプレイドライバを生成させる。これをDOS/Vの\$DISP.SYSと差し替えることで、DCGA対応のDOS/V起動ディスクが完成するというワケだ。

これができれば後は簡単で、DCGA対応起動ディスクでBICOM SL60を起動させ、HDDをフォーマットしてからシステム転送すればよい。これで、DCGA画面を持つDOS/Vマシンが完成する。

参考までに、筆者のBICOM SL60で使用していたconfig.sysとautoexec.batの内容を下記に示しておく。試行錯誤の跡が残っているため、若干見にくくなっているが、DOS育ちの方には、これを見ればどのように日本語化しているのかがおわかりになるであろう。なお、フォントドライバは、当時有名であったFONTXを使用している。FONTXの特徴は、設定ファイルを変更することで、FONTX対応の好きなフォントを利用することができることだ。筆者のBICOMでは、当時ソフトウェアの自販機であったブラザーの「TAKERU」(覚えている方、いらっしゃいますか?)で購入した「教科書体フォント」(kyohn16x.tlf, kyohn19x.tlf, kyozn16x.tlf)を使って日本語化している。そのため、表示される日本語が、妙に怪しかったりする…… ^ ^ ;; (012)。日本語FEPは、これもまた当時定番であったWXII+をインストールした。

### \* config.sysの例

```

buffers=30
files=30
dos=high,umb
country=081,932,c:\dos\country.sys
shell=c:\dos\command.com /p /e:256

device=c:\dos\himem.sys
device=c:\dos\em386.exe 400 ram frame=d000 i=f500-f700 i=b000-b7ff

rem devicehigh=c:\dos\font.sys /p=c:\fontjp\
devicehigh=c:\fontx\fontx.sys /p=c:\fontx\
rem devicehigh=c:\dos\disp.sys /h=lc
devicehigh=c:\dos\dispdc.sys
    
```

```
devicehigh=c:\dos\ansi.sys /x
devicehigh=c:\dos\$ias.sys /r=1
rem devicehigh=c:\dos\kkcfunc.sys
rem devicehigh=c:\dos\smartdrv.sys 512 256
rem devicehigh=c:\dos\rndrdrive.sys 1024 /e

rem devicehigh=c:\wx2\wxk.sys
rem devicehigh=c:\wx2\wx2a7.sys /dc:\wx2\wx2l.dic /vf

devicehigh=c:\wx2\wxk.sys /a3
devicehigh=c:\wx2\wx2a7.sys /dc:\wx2\wx2l.dic /a3 /vf
```

## \* autoexec.batの例

```
set cpbackup=c:\cpbackup\data
set sys=c:
set conspec=c:\command.com
prompt $p$b

path = c:\cpbackup;c:\;c:\dos;c:\bat;c:\vz;

lh c:\dos\keyb.com us,437,c:\dos\keyboard.sys
c:\dos\keyb.com jp,932,c:\dos\keyboard.sys
:mode con rate=30 delay=2
set temp=c:\dos
:lh c:\dos\mouse.com
:lh c:\dos\mouse.com /c1
lh c:\dos\vpmouse.com
ver
lh c:\dos\simkey.exe
```

以上がBICOM SL60の日本語化についてであるが、実は筆者のマシンでは試行錯誤の痕跡で、実はもっと変な設定になっていた。最初、このマシンがDCGA仕様であることに気がつかず、DOS/Vを入れてしまった。それも、手元にあったIBM DOSJ 5.0/Vを入れてしまったのである。当然、日本語は表示できない。調査の末、フリーソフトでDCGA対応のDISPDC.SYSの存在を知るが、如何せん、DISPDC.SYSを得るためには、IBM DOSJ 5.02/Vの\$DISP.SYSが必要であることが判明。横着物の筆者は、DOS全部を入れ替えず、ディスプレイドライバのみDOSJ 5.02/Vにパッチを当てたものに変更することで対

応し、何とか無事日本語を表示させることができるようになる。

しかし、世の中そう甘いものではない。101英語キーボード互換であるBICOMでは、DOSJ 5.0/Vを使用すると日本語FEPの起動ができない。DOSJ 5.0/Vでは、PS/55あるいはテラドライブのキーボードしかサポートしておらず、英語101キーボードやAX、J-3100の各キーボード用の日本語キーボードドライバは、DOSJ 5.02/Vから標準装備となったのだ。要は最初からDOSJ 5.02/Vを入れておけば、全てが解決できたのであるが、ここでも横着物の筆者は結局DOSを5.02にアップグレードせず、あの有名なsimkeyを用いてFEP制御を行ってしまったというワケだ。autoexec.batの最終行に「simkey.exe」が記述されているのは、そのためである。

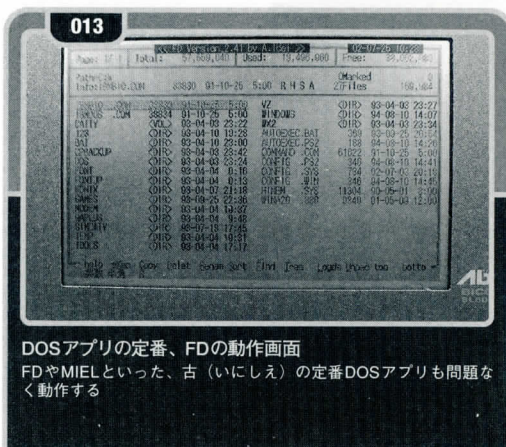
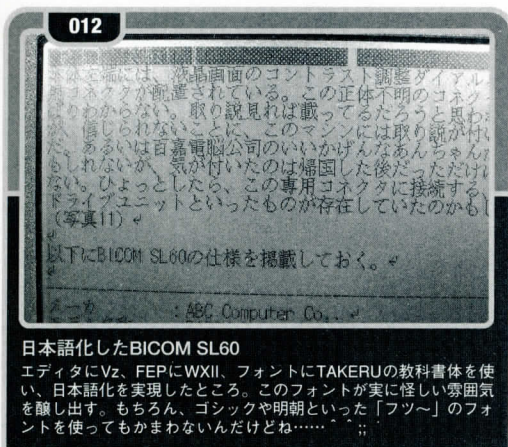
しかし、テラドライブとはこれまた懐かしいねえ。セガ・エンタープライゼスが発売したテラドラは、当時としては画期的な2CPU構成のマシンで、80286と68000を搭載、DOS/Vも走っちゃったという、今から考えてみればかなりカルトなマシンだった。コレクションに欲しいと思う今日この頃ではある。

かくして、筆者のBICOM SL60は、教科書体という極めて怪しいフォントと、WXII+で、日本語環境を構築した。こうして日本語化の方法を述べてみると、まさにDOS/V初期の頃を苦労そのままトレースしているようで、妙に懐かしくなってしまうな。^\_^;;

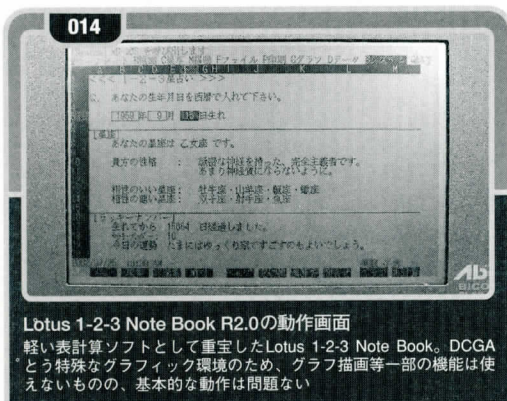


## 🕒 BICOM SL60の使用感

さて、日本語化されたBICOM SL60の使用感であるが、







**Lotus 1-2-3 Note Book R2.0の動作画面**  
 軽い表計算ソフトとして重宝したLotus 1-2-3 Note Book。DCGA  
 という特殊なグラフィック環境のため、グラフ描画等一部の機能は使  
 えなものの、基本的な動作は問題ない

DOSベースのアプリケーションであれば快適に使用することが  
 できる。Vzエディタ、FD、MIEL等の定番DOSア  
 プリも、サクサクと動く。筆者がこのマシンを使用し  
 いた頃は、WEBなどは当然まだ無く、パソコン通信全盛  
 の時代だったので、シリアルポートにポケットモデムを接  
 続し、WTERMやHTERMといった通信ソフトを使って  
 通信を行っていた。これらの動作にも、特に支障は生じ  
 なかった。おそらく、EtherPPPやDOSPPPといったDOS  
 ベースのPPPドライバを導入し、Dmailなどのメールク  
 ライアントソフトを持ちいれば、email環境も容易に構築  
 することができるであろう (013)。

HDDの中を調べていたら、今となっては珍し  
 いアプリケーションがインストールされていた。

Lotus 1-2-3 Note Book R2.0である。非常に軽い表  
 計算ソフトとして、重宝していたものだ。グラフィックが  
 DCGAであるため、グラフ表示等はできないが、通常の  
 表計算であれば全く問題無く使用することができる (014)。



**鉱石ラジオキットの内部構成**  
 半田付けが不要なので、確かに小学生でも楽に組み立てることが  
 できる。しかし、アンテナコイルのボビンがピンク色というのも、す  
 ごい配色だ



**「小学生の理科工作(1) 鉱石ラジオキット」の外箱**  
 秋葉原は瀬田無線で1,600円でも購入した、鉱石ラジオキット。ど  
 こどなくレトロな感じがして、妙になつかしい

## 🌀 おわりに

さて、先日秋葉原を訪れた際に、また無駄遣いをやっ  
 てしまった。ガード下にあるショップ「瀬田無線」の前  
 を通りかかったところ、なにやらレトロなパッケージが目  
 についた。「小学生の理科工作① 鉱石ラジオキット」と  
 書かれたその箱であるが、国籍不明の男の子がクリスタ  
 ルイヤホンに耳を当てて微笑んでおり、いかにも怪しい  
 雰囲気である。そしてこのキット、何より値段がすごい。  
 定価がたったの1,600円なのだ (015)。

本キットは大阪の輸入業者が仕入れているものだが、物  
 はイスラエル製。小学生向けということで、配線はすべ  
 て金属ファスナーで接続し半田付けは不要となっている。  
 同調コイルは、直径50mmの大迫力モンで、ボビンの色  
 がピンクという結構シュールな配色だ。シャーシはプラ  
 スティック製で、なぜか三角形をしている (016、017)。

子供向けの電子工作キットであるが、パッケージデザ  
 インとシュールな配色の同調コイルの色に魅かれ、思わず購  
 入してしまった。この秋の夜長に、いっとき子供に帰っ  
 てみたいと思われる方は、是非購入して組み立てて、一  
 人密かに怪しくラジオ放送を楽しんでみていただきたい!!!

**017**



TREE OF KNOWLEDGE  
Product No.3010

**Made in Israel**  
**Tree of Knowledge**  
**EDUSHAPE LTD.**  
**P. O. BOX 792**  
**Deer Park, N.Y. 11729**  
**Tel. 516-427-4372**  
**Toll Free: 800-404-47**  
**Buki France**  
**5, rue de Crimée**  
**Paris 75019**  
**Tel. 0140334533**

外箱の記載  
 Made in Israelと記載されている